

小学校教員養成課程の大学生における 外国語教育への認識の変化

－授業構成の理解とSmall Talkの実践から－

大場 浩正*

(令和6年10月7日受付；令和6年10月24日受理)

要 旨

本稿の目的は、小学校教員養成課程に学ぶ大学生の小学校外国語（英語）教育に対する認識が、英語授業づくりに関する学びや自作のSmall Talkの実践を通して、どのように変化するかを探ることである。これまでの調査から、小学校教員養成課程の大学生は、小学生に英語を教える際の授業構成や自身の英語力などに大きな不安を抱えていることが明らかになっている（白土，2022；渡邊・大場，2022など）。本実践では、小学校の英語指導に関する授業において、大学生たちは小学校外国語（英語）の授業で使用されている教科用図書（教科書）の構成と授業方法の基礎を学び、さらに、オリジナルのSmall Talkによる模擬活動の実践を通して、小学校外国語（英語）教育について体験的に様々な気づきを得たようである。学習者たちの授業後の振り返りから、自分自身の英語力の課題や児童を主体に捉えた時の英語の使用について、さらに、Small Talkの内容を教科横断的に考えることの大切さを実感したようである。「言語活動」を通してコミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力を育むことを目指す、小学校の外国語（英語）教育に関する意識が大きく変化したようである。

KEY WORDS

Foreign Language Activities and Foreign language 小学校外国語活動・外国語 Small Talk スモールトーク Class Structure 授業構成 Changes in Perceptions 認識の変化

1 はじめに

本稿の目的は、小学校教員養成課程に学ぶ大学生の小学校外国語（英語）教育に対する認識が、英語授業デザインに関する学びとSmall Talkの模擬指導実践を通してどのように変化するかを探ることである。特に、外国語の学習を促進すると言われている相互交流（interaction）としてのSmall Talkのシナリオを自作し、模擬活動として受講生を対象に実践する体験的な学びが、これまで抱いていた小学校外国語（英語）教育に対する不安を払拭することに寄与するのかを吟味する。また、このような探究を通して、小学校教員養成課程においてどのような授業内容や方法が効果的であるかの示唆を得ることもできるであろう。

2020年（令和2年）度から、現行の小学校学習指導要領（文部科学省，2018）により、高学年で外国語が教科化された。社会の益々のグローバル化へ対応するように「コミュニケーション」をより重視した内容となり、「話すこと」の技能が「話すこと [発表]」と「話すこと [やり取り]」の2領域に分けられた。このことはこれまで以上に、外国語活動・外国語を担当する小学校教員への負担と不安を増大させることになり、効果的な小学校外国語（英語）教育を展開していく上での大きな障壁となっていると言えるだろう。近年は、外国語専科教員が増えてきているとは言え、複数の学校やクラスを受け持つ場合、児童理解や学級の実態把握がままならず、良好なコミュニケーション活動が展開できない場合も多いのではないだろうか。これまでの調査からも、コミュニケーション活動を基盤とした授業展開の基礎となる英語力に不安を抱えている教員も多いことが明らかになっている（AEON，2019，2021；及川，2017；大城・深澤，2018；大場，2022；立野・大場，2022；チェン・村上，2013；前田，2021；米崎・多良・佃，2016など）。小学校外国語（英語）教育における指導力の向上や英語力への不安の軽減のためには教員研修の充実が重要である。現在ではオンラインも含め、様々な研修会が開催されているが、多忙な教員にとって参加が難しい場合も多いのではないだろうか。

従って、今後は、現職の教員のみならず、教員になる前の教員養成段階において小学校外国語（英語）教育を担う指導力や英語力の向上を目指した教育内容と方法が問われることになるだろう。しかしながら、小学校教員養成課程

*人文・社会教育学系

の大学生においても、小学生に英語を教える際の授業構成や自身の英語力（特に話す力）などに大きな不安を抱えていることが明らかになっている（井上・細井・森下, 2017; 酒井・内野, 2018; 白土, 2022; 澁井, 2019; 津田, 2022; 三浦・菅井, 2018; 渡邊・大場, 2022, 2023など）。渡邊・大場（2023）は、初等教員養成課程の大学生の英語に関する姿勢を経年的に調査し、一貫して英語への苦手意識を持っており、英語への自己効力感の低さを明らかにしている。小学校教員として教育現場で実際に英語を指導する前に、自身の英語運用能力や授業設計力に対して自信を持ち、教師としての自己効力感を高めることは大変重要であるだろう。

本稿で報告する実践では、全6回の授業を通して小学校外国語（英語）教育の基礎と検定教科書の構成を学び、また、良好な人間関係を構築することに効果的であるファシリテーション技術に基づいたSmall Talkの活動によって即興的に英語を使用する練習を行った。さらに、Small Talkのシナリオを自作し、模擬活動として受講学生を対象に実践した。本稿では、Small Takの演習に焦点を当て、その活動に対する学生の振り返りを質的に分析し、小学校外国語（英語）教育に関する認識の変化を探った。なぜなら、Small Talkのシナリオを作成し模擬活動を行うことによって、少しでも自身の英語運用に自信をもってもらいたいからである。このような探究を通して、教員養成課程においてどのような授業内容や方法が効果的であるかの示唆を得ることもできるであろう。

2 先行研究の概観

本実践では、小学校における外国語活動・外国語科の目標等と検定教科書の内容及び授業構成の基礎を学んだ後、現行の小学校学習指導要領で強調され、グローバル化の急速な進展における外国語によるコミュニケーション能力の向上に有益であると思われるSmall Talkに焦点をあてた演習を行った。前述のように、本稿では特にSmall Talkの効果を探っていく。従って、以下では、Small Talkがいかに重要であるかを理解するために、Small Talkに関する先行研究を概観する。

文部科学省（2017）によると、Small Talkとは、高学年新教材で設定されている活動であり、「2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする」（p. 130）活動である。さらに、「5年生では指導者の話を聞くことを、そして6年生ではペアで伝え合うことを中心に行う活動」と述べられており、川村（2020: 115）によれば、前者は「インプット型Small Talk」であり、後者は「アウトプット型Small Talk」となる。

Small Talkは、授業の初めに相手を替えて1～2分程度の対話を2回程度行う対話的な言語活動とされ、その目的は、(1)既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、及び(2)対話を続けるための基本的な表現の定着を図ることの2点である（文部科学省, 2017, p. 84）。(1)については何を持って定着と判断するかは難しい問題ではあるが、少なくともある単語や表現の意味を理解したり、暗記して言えるというレベルから、ある目的のために適切な場面や状況で即興的に使用できるようになることが定着と捉えることができるであろう。つまり、多様な人々との対話の中で、外国語によるコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、既習の語や表現を使用することであろう（文部科学省, 2018）。(2)に関しては、対話を継続させるための基本的な表現を指導することが重要である。「何でもいいから、知っている単語を言って、1分間会話を続けましょう。」では、言語表現に対してまだまだ未熟である児童にとっては酷である。文部科学省（2017）でも提示しているように、「繰り返し」「確かめ」や「相づち」のような「対話を続けるため基本的な表現例」を指導する必要があるだろう（泉, 2017）。

実際のSmall Talkの指導手順としては、以下の5段階が考えられる（今井, 2023; 今井・中山・西川・大場, 2023; 川村, 2020; 早津, 2022; 文部科学省, 2017; 山口・巽, 2020など）。

- (1) 導入：教師によるSmall Talkのデモンストレーション（教師やALT（Assistant Language Teacher）のモノログ、教師とALTの対話、あるいは教師やALTと児童の対話）。
- (2) 1回目のSmall Talk：児童同士の対話。
- (3) カンファレンス（中間交流、中間評価、中間指導）：質問や意見を出し合う。言いたかったけど、言えなかった単語や表現の確認や言い換え（ALTに尋ねたり、iPadなどを用いて調べる）。
- (4) 2回目のSmall Talk：児童同士の2回目の対話（同じ相手でも、相手を替えてもよい）。
- (5) 振り返り：2回目のSmall Talk後、自分自身の変容や対話からの学びなどを振り返り、次回のチャレンジなどを話し合う。

このようなSmall Talkの手順は、アウトプット型のSmall Talkであり、第6学年で身近な話題（食べ物やスポーツ

など)について主に児童同士がやり取りする活動と位置付けられているが、第5学年での活動に取り入れても問題ないと思われる。実際にこれまで、このようなSmall Talkに関する多くの実践が行われてきている。

川村(2020)は、2020年度からの小学校英語教科化にむけた2019年度の移行措置期間に行われたSmall Talkの効果的な指導について報告している。実践は、国立の小学校6年生の外国語活動において、前述のSmall Talkの手順で行われた。1回目のペアによる即興的に対話において、児童が英語での言い方が分からず、「困った感」を意識することが大切であり、実際に多くに質問が出ていた。しかしながら、どのように英語で表現するか知りたいという課題意識を持って中間交流に臨むことで、「確認」や「言い換え」などの「方略的能力」(コミュニケーション能力の一つ)を高める指導が可能であることが分かった。小学校と中学校で連携し、継続してSmall Talkを行い、既習表現を繰り返し使う機会を児童生徒が得ることによって、「話すこと[やり取り]」の能力の向上を目指すべきであると述べている。

山口・巽(2020)は、児童の発達段階や興味関心に配慮しつつ、低学年から帯活動としてSmall Talkを継続的に行うことが発話パフォーマンスにどのような影響を与えるかについて調査した。岐阜市の公立小学校1年生から6年生までの児童139名を対象に、(1)ALTとHRT(Homeroom Teacher)の会話、(2)ALTと児童の会話、(3)児童同士の会話、(4)ディスカッション、(5)児童同士の会話、そして、(6)振り返りの順でSmall Talkを1年間継続し、2回のパフォーマンステストを行っている。結果として、児童の即興的な会話での発話総語数が増加し、語彙や表現の種類は学年が進むにつれて多くなることが明らかになった。また、山口・巽(2021)は、Small Talkを毎時間の授業で実施することで、児童の発話パフォーマンスがどのように変化していくのかを調査した。この研究では、児童の英語学習に対する情意面がSmall Talkにどのような影響をもたらすのかを検証し、Small Talkの指導の効果を高めることを目的とした。岐阜市内の公立小学校6年生30名を対象に、週1回の外国語の授業で、毎時間の授業開始直後にSmall Talkを実施し、パフォーマンステスト(7月と2月)を行った。また、情意面と児童のコミュニケーションの様子の関係を調べるために、英語学習に対する意識アンケートを実施した。結果として、児童は即興的な会話の中で使える表現や語彙を増やしていき、「もっと伝えたい」など、会話を積極的に続けようとするのが明らかとなった。表現や語彙の習得が英語でのコミュニケーションへの意欲的な態度を育むが、そこには「緊張しないで話せる雰囲気作り」のような情意面が重要な要素となってくるということが示された。更に、山口・吉澤(2023)は、Small Talkにおいて、児童がどのような発話をしているか、会話分析によってその内容の経年変化を調査した。児童の情意面を考慮に入れた分析の結果、ペアとの友人関係やSmall Talk時の緊張感が、会話のターン数や相手の話に反応する語数などへ影響を与えることが明らかになった。このことから、Small Talkの実施においては、児童の情意的な特性を十分に配慮したペアリングの重要性を述べている。

石森(2021)は、小学校外国語(英語)教育におけるSmall Talkの在り方や話題について検討し、話題は児童が楽しいと感じるものが重要であるが、同時に発達段階を考慮し、知的で思考を伴う要素を含み、児童からもSmall Talkの話題を提案してもらう工夫が大切であると述べている。中学1年生を対象に調査が行われ、Small Talkに関しては、「小学校6年生時に行ったSmall Talkの話題」と「自分たちが楽しいと思う話題」に関する質問項目が用いられた。結果として、過去のSmall Talkの話題は、「好きな〇〇(食べ物、動物、色など)」「行ってみたい国・場所」及び「将来の夢」など文部科学省が例示する話題がほぼ用いられていた。また、単元の内容を題材にした話題もあり、単元で学習した語句や表現を活用して有機的に展開していけば、コミュニケーションはより豊かになるだろうと述べている。更に、楽しいと思う話題は、「好きな〇〇」であり、「音楽」「ゲーム」「キャラクター」などの回答が得られた。児童の認識と大人の認識には少なからず「ズレ」が生じているため、児童がSmall Talkの話題を提案したり、または児童側からアイデアを引き出すような工夫があっても良いのではないかと石森は述べている。自分たちが提案した話題であれば、主体的・積極的にコミュニケーションを図る姿勢が期待できるだろう。しかしながら、Small Talkは「既習表現の定着」と「対話を続けるための表現の定着」を目的としているため、教師側が児童に使用してもらいたい表現とSmall Talkの話題の融合を上手く行う必要があるだろうと述べている。

原口(2021)は、Small Talkを取り入れた外国語科の授業実践が、本当に児童自身の考えを英語で伝える力を高めることに貢献できるのかを調査した。福岡県内の小学校6年生を対象に、『I have a dream. 将来の夢を紹介しよう』の実践において、Small Talkで見本を示した。実践におけるワークシートの「I want to be ~.」「I like ~.」「I want ~.」「I can ~.」を使って将来の夢とその理由を紹介できたか及び「What do you want to be?」を使って、たずねることができたか」という項目に、約70%の児童が「できた」あるいは「よくできた」と回答した。Small Talkで見本を見せたことの成果であると述べている。

大場・高井・井口・金澤(2021)は、コミュニケーションを図るために必要な資質・能力の育成には、外国語によるインタラクション(相互交流)が必要であり、ペアやグループ活動がより効果的に機能するためには、学習者同士

がよりよい人間関係の中で互いを尊重し合い、そして協同的にお互いを高め合おうとする活動となるように工夫されることが重要であると指摘している。そして、その工夫の一つがファシリテーション技術の導入であると述べている。教師の「問い」に対し、児童がミニホワイトボードに解答を書く活動（可視化）を行うと、ALTと教師が協力しながら読み上げ（発音）・承認することで、英語が苦手な児童も得意な児童も楽しみながら活動に取り組んでいた。他にも、ミニホワイトボードを用いたSmall Talkの実践において、ホワイトボードにイラストを描き、そのイラストについてオープン・クエスチョンを用いながらインタビュー形式を進めた。大切なことは、授業者は児童の絵に対して常に温かい言葉で称賛し、承認することである。また、失敗や間違いをしても大丈夫な雰囲気づくりを試み、どんな意見も考えも温かく迎え入れることも重要である。最初は上手くいかなくても、継続して活動していくことで、児童は、“Tell me more.”などのオープン・クエスチョン（大場，2020；ちよん，2016）を用いながら、コミュニケーションを楽しんでいる様子が見られたと述べている。実践から、ファシリテーション技術の一つであるホワイトボード・ミーティング®を活用することで、すべての児童が承認及びエンパワーされ、どの児童も発表に対する不安を軽減し、積極的に授業に取り組む様子が見られたようである。

小学校外国語（英語）授業におけるSmall Talkの効果検証の研究ではないが、前田（2021）は、小学校教員を対象に、「Small Talkの目的や留意点を学び、単元目標と関連した効果的なSmall Talkができるようになる」ことを目的に行った研修の成果を報告している。研修の大きな流れは、(1) Small Talkとは何か、(2) 文科省チャンネル（YouTube）よりSmall Talkの実践事例を視聴し、どのような工夫がなされているか考察する、(3) 明海大学の教職課程履修中の学生に教師役と児童役を割り当て、Small Talkについての指導の前後でどのような変化が起こったか解説する、(4) 研修講師が対話方略を活用して実際に模擬授業を行う、そして、(5) 受講生である小学校教員に実際にSmall Talkに挑戦してもらうというものであった。対話方略に関しては、文部科学省（2017）が解説している、①対話の開始、②繰り返し、③一言感想、④確かめ、⑤さらに質問、⑥対話の終了に焦点をあてた。また、実際に対話方略を使用した模擬授業（テーマは、What do you want to be?）を、表1のSmall Talkの展開例を示しながら行った。研修の成果として、受講生のリフレクションシート、事後アンケート及び感想を質的に分析した結果、受講者は対話方略を活用して、既習表現の定着を図り、対話をより長く続けられるように指導することの重要性を認識したことが明らかになった。

他にも、早津（2022）、今井・中山・西川・大場（2023）及び植木・直井・渡邊・大場（2024）は、Small Talkを継続的に実施することによって、会話を続けることが出来るようになり、自己効力感が高まったことを報告している。特に、植木・直井・渡邊・大場（2024）は、ソーシャルスキルを高めながらSmall Talkの指導を行うことが、児童の自己効力感の向上に寄与することを示している。また、今井（2023）

表1 Small Talkの一例（前田，2021，p. 63より）

Teacher（以下：T）：（筆者が子ども時代に琴を演奏する写真を提示する。）When I was six years old, I practiced playing the koto（琴）。（既習事項である過去を表す表現を使用し、定着を図る。）
T：Do you know a “koto”? 【対話方略：質問】
Student（以下：S）：お琴？
T：That's right. It is a Japanese musical instrument. Look at this picture.（琴の写真を提示する。）
T：How many strings are there on the koto? 【対話方略：質問】（履修事項の「数を聞く」の確認） How many strings are there on the koto? 【対話方略：（ゆっくり）繰り返し】
T：Do you know strings?（ジェスチャーで示す。） 【対話方略：さらに質問】 The guitar has six strings.（ヒントを与える。）
S：ああ、弦だ！
T：Yes. Strings are called 弦 in Japanese.（再度琴の写真を提示し、一緒に弦の数を確認する。）
T：There are 13 strings on the koto. Please repeat after me. There are 13 strings on the koto.
T：There are 13 strings on the koto.
T：Very good. 【対話方略：一言感想】
T：I liked the sound of the koto, so I wanted to be a koto player at that time. What do you want to be in the future? Let's talk about it with your partner.

【 】内に対話方略を、（ ）にその他の工夫を示す。

は、振り返りの視点を取り入れたSmall Talkの実践によって、児童の発話パフォーマンスが向上することや、Small Talkにコミュニケーション・ストラテジーとしての会話テクニックを継続的に取り入れていくことで実際のコミュニケーション場面で少しずつ活用できるようになっていくことを示した。

3 実践内容

前述のように、現職の小学校教員にのみならず、小学校教員を目指す小学校教員養成課程の大学生においても、小学生に英語を教える際の授業構成や自身の英語力（特に話す力）などに大きな不安を抱えている。小学校教員として

教育現場で実際に英語を指導する前に、自身の英語指導力や英語運用能力に対して自信を持ち、教師としての自己効力感を高めることは大変重要である。このような課題を踏まえ、本実践では、小学校教員養成課程に学ぶ大学生が、ファシリテーション技術に基づく授業デザインを学び、さらに英語運用能力の向上を目指したオリジナルのSmall Talkの模擬活動を行った。

調査対象者は、授業科目「小学校英語の教材開発とプログラムデザイン」を受講している2年生7名であった。本授業は後期の授業後に集中講義として開講された選択科目であり、前半の7回分の授業（各90分）を著者が担当した。受講者は、大学入学後の約2年間で、英語コミュニケーション科目（1年生週2回、2年生週1回の必修）を受講していたが、小学校英語指導に関する授業科目はこれまで受講していない。学校現場における短期間の観察実習に参加し、大学内における模擬授業も多少行ってきたが、その経験はまだまだ乏しい状態であった。本格的な教育実習や各教科の指導法の授業は、3年生で行われるため、まだその準備段階であった。

表2は、調査の対象となった授業科目「小学校英語の教材開発とプログラムデザイン」の学習内容（前半7コマ）である。最初の2コマでは、まず、学習指導要領における外国語活動・外国語科の目標、育成すべき資質・能力及び「主体的・対話的で深い学び」について学習した。その後、実際の教科書の構成、単元や1時間の授業内容を検討した。その際、バックワードデザインやパフォーマンス課題及び4技能5領域に関する言語活動に関して学んだ。

3及び4コマ目では、児童をエンパワーし、安心・安全な環境で外国語を学習するための協同学習とホワイトボードを用いたファシリテーション技術（ちょん, 2016）を体験的に学んだ。その後、著者によるSmall Talkに関する実践を体験した。Small Talkは、現行の学習指導要領で言及されている言語活動の一つであり、文部科学省（2017）によると、高学年新教材で設定されている活動である。実際の活動では、最初に、オープン・クエスチョンとあいづち（表3参照）を導入・練習した後に、これらを使いながらペアで数回インタビュー形式のSmall Talkを体験した。“favorite food”や“favorite sport”について練習を重ねていくうちに徐々に会話が续くようになった。その後、前田

（2021：63）の実践を参考に、自由なテーマでSmall Talkの模擬活動を構想し、実践した。前田は、実際のSmall Talkの例を示し、解説している（表1参照）。本実践でも、学生たちはその例を参考にしながらオリジナルのSmall Talkのシナリオを作成し（5コマ目及び授業外で）、6及び7コマ目で他の学生を児童役として模擬活動を行った。表4は実際にある学生が作成したSmall Talkのシナリオである。実際の活動では、パワーポイントを用いて情報を可

表2 各時間の学習内容

コマ	学習内容
1 & 2	・学習指導要領における外国語活動・外国語科の目標、育成すべき資質・能力及び「主体的・対話的で深い学び」についての学習。 ・実際の教科書の構成、単元や1時間の授業内容を検討（バックワードデザイン、パフォーマンス課題）。
3 & 4	・協同学習とファシリテーション技術に基づく外国語活動・外国語の指導方法を体験的に学習。 ・Small Talkに関する実践
5	・Small Talkの作成（課題）
6 & 7	・自作のSmall Talkによる実践（模擬活動）

表3 オープン・クエスチョンとあいづち

Open questions	Responses
1 What do you mean?	1 Uh-huh
2 Tell me more.	2 I see.
3 For example?	3 I get it.
4 Tell me more details.	4 Yes.
5 More specific?	5 Really.
6 What kind of image?	6 Right.
7 Tell me the episode.	7 And then?
8 Anything is OK.	8 I understand.
9 Anything else?	

（大場, 2020）

表4 ある学生のSmall Talk例（原文のママ）

T (Teacher) : Do you know curry?
S (Student) : カレー ?
T : That's right. Curry is an Indian food. Look at this picture. (インド周辺の地図を提示する) Where do you think India is? (場所を聞く) Where do you think India is? (ゆっくり繰り返す)
T : Do you know India is big? (大きいことをジャスチャーで示す。 ヒントを与える)
S : ここだ! (1人を指名し、どこか指で示してもらう)
T : Yes. India is here. (写真でもう一度場所確認する) By the way, which do you like for curry, rice or naan? (ゆっくり繰り返す)
T : If you like rice better, please raise your hand. (手を挙げている人を確認する) If you like naan better, please raise your hand. (手を挙げている人を確認する) Very good. (一言感想) I like naan for curry because my favorite butter chicken curry goes well with naan. Let's talk with your partner about which one you like better, rice or naan?

視化しながらやり取りを進めた。また、今回の模擬活動の対象は大学生であるので、内容は大学生レベルでも良いことにした。

4 結果と考察

表5 「Small Talk のプレゼンテーションを通して、感じたこと、気づいたこと、思ったこと、及び学んだこと」の回答の分析

カテゴリー	コード	回答内容（原文のまま）
インストラクション（説明、指示）	英語によるインストラクション	説明などを英語でした後に、子供が理解できていないようだったら英語でゆっくりもう一度説明したり、日本語でしたりするという対応の仕方も重要だと気づいた。（学生B）
		自分のプレゼンは日本語をほとんど使わず、英語を多く使いすぎてしまったと反省しています。（学生C）
		自分自身が英語を一生懸命使っているという姿を見せるのはいいことかもしれませんが、子どもたちが理解できる授業をより大切にしたい方がよかったです。（学生C）
		自分の中ではゆっくり話してジェスチャーを付ければ伝わるだろうと考えていたのですが、知らない単語を頑張って工夫してもすべての児童が気づき、理解するのは難しいので授業の進行に関わる部分は丁寧にやりたいと思いました。（学生C）
		クラスルームイングリッシュをもっと身に付けたいと感じました。（学生G）
	英語でしゃべらなければならないと思うあまり、言葉に詰まるところがあった。（学生G）	
英語と日本語のバランス	教員の英語と日本語のバランスが重要だと感じた。（学生B）	
日本語で説明	もっと日本語で説明を加えてわかりやすくしてもよかったですかと思えます。（学生G）	
児童の英語使用	反応（リアクション）の方法	児童の反応の仕方を取り込むことで、より、実践的な英語の授業をできると思いました。（学生D）
	主体的な英語使用	子どもたちがどうすれば英語を主体的に使ってくれるか考えるいい機会になりました。（学生C）
	時間の制約とコミュニケーション	Small talkはあくまで授業内容の導入や、掴みの部分として作用してくるものなので、どれだけ短時間や決まった時間の中で児童とのコミュニケーションを取ることができると勝負。（学生A）
児童を承認	褒める	経験としても小学生相手には楽しく学ばせること、積極的に褒めてあげること、存在に気付いていることを示すこと等、多くのことを意識しながら作成。（学生F）
	対応の方法	クラス全体にご飯かナンのどちらが好みかについて聞き、その際に一人一人どちらかを確認することで、教員が子どもたちの1人1人を見ていることをわかってもらうことができると考えた。（学生E）
教科横断	地理	外国の話だと、地図を用いるなど、教科横断的に学ぶ授業を作りたいと思った。（学生B）
		（自分のプレゼンテーションでは、初めにカレーについて触れ、その後にインドに触れ、最後にカレーにはご飯かナンのどちらが好みかについて話し合った。）まず良かった点としては、主に社会の地理の部分に関連づけてカレーについて話し合うことで他教科連携の観点でスモール・トークを進めることができた点である。（学生E）
	他教科への応用	英語はもちろん他の教科の授業にも生かしていけたらいいと考えた。（学生F）
満足感	教員生活での有効性	実際の子ども達を想像して授業を考えることで、今回使用したものが教員生活で活かせると感じた。（学生F）
	内容	自分なりによくできた発表だったのではないかと思います。（学生G）
改善点	時間配分	時間配分の意識が不足していたように思います。次回作る機会があれば時間制限を設けて行いたいと思いました。（学生A）
	内容	インドについて触れた後に、カレーについて触れることで、よりスムーズに内容の展開に進めることができると考えた。（学生E）
	準備	準備の大切さを学びました。（学生D）

表5は、模擬活動後の振り返りにおける質問項目「Small Talk のプレゼンテーションを通して、感じたこと、気づいたこと、思ったこと、及び学んだこと」の回答を質的に分析した結果である。『インストラクション（説明、指示）』『児童の英語使用』『児童を承認』『教科横断』『満足感』及び『改善点』の6つのカテゴリーが生成された。実際に活動をデザインし、体験してみることで多くの学びや気づきが得られたようである。

『インストラクション（説明，指示）』に関しては，出来るだけ英語で模擬活動を行うことを指示していたこともあり，苦勞していたが，経験してみることでのどのように説明すると良いか，体験から様々な気づきを得たようである。『児童の英語使用』と『児童を承認』では，どのようなSmall Talkの内容を提示すると，児童が活動の意図を理解し興味を持って主体的に活動に関与できるかを学び，また，承認することの重要性に気づいた学生もいた。『教科横断』については，そもそも他教科の内容を扱う英語は教科横断的であるという認識を持つことが大切であり，実際，社会（地理）や算数などの学びを取り入れた活動が多かった。さらに，自分なりに模擬活動をデザインし，うまく行うことが出来た『満足感』を得ると同時に，『改善点』に気づき，今後（例えば教育実習など）に活かそうとしている姿勢が見られた。

表6は，模擬活動後の振り返りにおける質問項目「他者の（Small Talkに関する）プレゼンテーションを通して，感じたこと，気づいたこと，思ったこと，学んだこと」の回答を質的に分析して結果である。『英語力』『活動の進め方』『教材作成』『内容』及び『楽しい活動』の5つのカテゴリーが生成された。実際に児童役となってSmall Talkを体験することによって多くに学びや気づきを得たようである。

表6 「他者の（Small Talkに関する）プレゼンテーションを通して，感じたこと，気づいたこと，思ったこと，学んだこと」の回答の分析

カテゴリー	コード	回答内容（原文のまま）
英語力	発音の正確さ	英語の発音ができている人が多いように感じました。いらないところで子音がくっついていて日本語っぽく聞こえてしまうようなことが多かったです。自分も気を付けようと思いました。(学生G)
活動の進め方	児童の英語使用	どうしたら子どもたちが英語を使って話しやすいか考え，単語を読ませたり，定型表現を提示したりしていて分かりやすいなと思いました。(学生C)
	児童の反応を予測	自分が想定しているよりも，子ども達は元気で，考えもそれぞれ違うので，みんなが楽しく学んで，話を聞いてくれるような工夫をする必要があると思いました。(学生D)
	易しい英語	あまり難しい英語を使わない。(学生B)
	日本語の補足	小学生が英語を学ぶということを想定して，日本語での補足がしっかりしている人が多いという印象を受けました。(学生C)
	活動手順の提示	多くの人がペアを作った後にじゃんけんをして順番を決めさせ，その後に時間をどの程度設けるか伝えることで，子どもたちがどの程度の時間話せばよいか，また手順などが分かりやすくなると考えた。(学生E)
教材作成	図の活用	イメージを持たせやすくするために，図などを用いて理解を深めることの重要性を学んだ。受けている側の目線に立つと，図一つあるだけでもかなりイメージがしやすかった。(学生B)
	児童の反応を予測	児童の反応や，考えることを予想した教材作りの大切さを学びました。(学生D)
	効果的なパワポの活用	パワーポイントを活かすことが大切だと感じました。議題であったり，実際に示した単語を画面上に移すことで，生徒にとって目標が見やすく，活動が円滑に進むように感じました。(学生A)
内容	好奇心の向上	意図的に子どもたちが分からないような単語をスモール・トークの中に入れることで，子どもたちがその単語の意味を想像し，考えるようにしていた。それによって，子どもたちの学習への好奇心を高めることができた。(学生E)
	児童の立場で思考	他の人のスモールトークの中でどのような意識を置けば，どのように授業が展開されるかを児童の立場で考えることができた。(学生F)
	視点の相違	もし他の人が自分と反対に重点を置いて指導していても，それに伴うメリットだけでなく，逆にどのような観点から見たときに弱くなってしまうかを考えることができて，自分で作成したよりも何倍もの学習効果を得ることができた。(学生F)
楽しい活動	ジョーク	ジョークを交えてやるのも受けている側からして，楽しかったし，その後の活動にも意欲的に取り組むことができたと感じた。(学生B)
	ユーモア	ユーモアがある発表が多くて参考になりました。(学生G)
	発達段階を配慮	どの子どもたちも楽しめるような，小学生向きの配慮をした授業づくりをすることが重要であると考えた。(学生E)

『英語力』においては，やはり，モデルとしての正確な発音の重要性に改めて気づき，また，『活動の進め方』では，児童の立場を経験することで，活動の明確で簡潔な手順の大切さを学んだようである。『教材作成』に関しては，児童の反応や考えを予測したり，児童が理解しやすいような図を使用した可視化などの重要性に気づいたようである。『内容』及び『楽しい活動』については，児童が興味を持ち，思考力・判断力・表現力を高めるような内容に

することの大切さに気づき、同時に、活動はやはり楽しいことが最も重要であることを感じたようである。特に、小学生段階では、楽しい英語活動が英語学習への動機を高めることを改めて学んだようである。

表7は、模擬活動後の振り返りにおける質問項目「今後のチャレンジやこれからどうしたいか」の回答を質的に分析した結果である。本授業は2年次の後期の授業後に集中講義として行われた。3年次には、5月に1週間、9月に3週間の小学校での教育実習が控えている。本授業を踏まえて、今後の抱負等を質問した。

表7 「今後のチャレンジやこれからどうしたいか」の回答の分析

カテゴリー	コード	回答内容（原文のまま）
英語力	自身の英語力	まずはクラスルームイングリッシュをマスターしたいです。まだまだ人前で話せるほどの英語力がないので、もっと英語に触れていきたいです。できれば今年中に英検を取得したいです。(学生G)
		今回のsmall talkでは、自分が英語を間違えることを少し恐れてしまい、日本語の割合が多くなってしまっていたので、どんどん英語で話すことにチャレンジして、子供と一緒に成長していくという気持ちで挑んでいきたいです。(学生B)
		Small talkを行った際に英語を多く使うことを意識したのですが、用法や文法、単語の意味を間違えて使ってしまったところがありました。児童は間違った表現でもいいから英語を使ってほしいですが、教師が間違えて児童がそれを真似してしまうのは良くないと思うので、英語の会話能力をもう少し上げたいです。(学生C)
英語使用	教師	定型表現などをうまく使い、出来るだけ簡単な英語で言いたいことを伝えるというのを大切にしたいです。(学生C)
	児童	自分の英語力を受け入れ、その上で教員である自分自身が英語を使おうという主体的な姿を子どもたちに示すことで、子どもたちが積極的に英語を使う姿勢を育成したいと考えた。(学生E)
単元・授業デザイン	パフォーマンス課題	単元の最後にあるパフォーマンス活動について、どのようにすれば子どもたちが興味を持ち、主体的に活動を行うことができるかについての、付加価値のつけ方などについて自分自身で学びを深めていきたいと考えた。(学生E)
	バックワードデザイン	これからの英語教育では、より対象学年や発達段階に即した学習を展開できるようになったから、バックワードデザインを含めた目標までの過程と、授業内であった4技能の指導の際の留意点等を意識しながら授業を展開できるようにしていきたい。(学生F)
	学習指導要領	学習指導要領や、育成したい資質能力を明確にして、授業を作成していきたいと思います。(学生A)
		今後は小学校英語の現状や、行われている指導法などについてより詳しく学び、学習指導要領で求められている能力の育成について、自分なりに考えていきたいと考えた。そのために様々な動画を視聴し、文献を読むなどして、現状の把握に努めたいと考える。(学生E)
	パワポの使用	パワーポイントを活用することで、生徒たちが円滑に学習できるように心がける。(学生A)
	時間配分	自分のプレゼンテーションに時間配分をしっかりと設ける。(学生A)
児童支援	励まし・承認	エンパワメントについて知識を増やしていきたいと考えた。私は正直、比較的他人をエンパワーすることができる人間であると考えている。それでどのようにすればもっと相手の心を温かくすることができるのか等を考えながらこれからの生活から意識を向けてみたい。(学生F)
		心が冷たい子には、認めてもらえないからという理由があることを学ぶことができたので、教員だけがその子を承認するのではなく、クラス全体でお互いに承認し合うことができ、失敗も大歓迎でいつでもチャレンジしていけるような環境を作っていきたいです。(学生B)
教育実習	臨機応変な対応	3年時は、小学校教育実習があり、計画通りに行かないことばかりだと思うので、今回の講義で学んだ生徒の反応に応じて難易度を下げるなど臨機応変に対応していきたいと思います。(学生B)

結果として、『英語力』『英語使用』『単元・授業設計』『児童支援』及び『教育実習』の5つのカテゴリーが生成された。やはり、模擬活動での英語の間違いや思うように英語を使用できなかった振り返りから、自分自身の英語力を高めることや、実際の活動において、児童が積極的に英語を使用したくなるような教師の英語による働きかけの方法を学びたいという姿勢が見られた。また、『単元・授業設計』では、「学習指導要領」の内容をしっかりと学び、授業

の中で初めて学んだ「バックワードデザイン」と「パフォーマンス課題」を取り入れた単元・授業をデザインすることへ意識が向いていったようである。さらに、児童を励まし、承認し合う、エンパワメントな環境を設定していくことへのチャレンジは、今後、教員に必要となるファシリテーション技術の獲得に向けた意識として重要である。特に、「私は正直、比較的他人をエンパワーすることができる人間であると考えている。それでどのようにすればもっと相手の心を温かくすることができるのか等を考えながらこれからの生活から意識を向けてみたい。」という回答から、英語指導の学びが、人として日常からwell-beingな生活を送ることの価値への気づきにつながったようである。

5 結論

本実践研究の目的は、小学校教員養成課程に学ぶ大学生（2年生）において、英語授業デザインに関する学びとSmall Talkの模擬活動実践を通して小学校外国語（英語）教育に対する認識が、どのように変化するかを探ることであった。特に、言語活動として重要な活動であるSmall Talkのシナリオを自作し、模擬活動として受講学生を対象に実践する体験的な学びによって、小学校外国語（英語）教育に対する意識の変容を探った。

このような学習指導要領に基づく授業づくりの理解と英語を使用することへのエンパワメントな環境づくりを体験的に学ぶことによって、学生の小学校外国語（英語）教育に対する意識の向上が明らかになった。学生たちは、オリジナルのSmall Talkを考え、模擬活動を行うことを通して、体験的に様々な気づきを得たようである。自分自身の英語力の課題や児童を主体に考えたときの英語の使用、また、Small Talkの内容として教科横断的に考えることなどが主たるものである。さらに、「この授業を受ける前までは、単語や文法の意味をはじめに教えて、反復的に活用させることが重要であると考えていたが、教員がゆっくり、ジェスチャーを用いて何度も活用することによって、子どもたちに意味を考えさせることが重要であると考えた。そのようにすることで、教員自身が英語を使うという姿勢を子どもたちに示し、子どもたち自身も英語を積極的に使うという姿勢を育み、中学校の学習につなげることができる。」という授業後の振り返りに見られるように、「言語活動」を通してコミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力を育むことを目指す、小学校の外国語（英語）教育に関する意識が大きく変化したようである。このような探究を通して、小学校教員養成課程においてどのような授業内容や方法が効果的であるかの示唆を得ることができた。

謝辞

本稿は、令和4年度日本教育大学協会研究集会（令和4年10月1日）において「小学校教員養成課程の大学生における外国語教育への認識の変化－授業構成の理解とSmall Talkの実践から－」と題して発表したものに加筆修正を加えたものである。発表に対する質問やアドバイスを頂いた方に感謝申し上げる。また、調査に参加して頂いた大学生の方々にも感謝する。

参考文献

- 石森広美（2021）.「小学校外国語教育におけるSmall Talkに関する考察」『宮城教育大学教員キャリア教育機構研究紀要』第3巻, 97-105.
- 泉恵美子（2017）.「小学校英語における児童の方略的能力育成を目指した指導」『京都教育大学教育実践研究紀要』第17号, 23-33.
- 井上 聡・細井 健・森下裕三（2017）.「小学校教員養成のための外国語（英語）コア・カリキュラムの効果的運用」『教職教育研究』（環太平洋大学研究紀要）1, 1-8.
- 今井洋太（2023）.「Small Talk活動後の省察が児童の発話パフォーマンスに与える効果－振り返りの視点を取り入れた実践を通して－」『教育実践研究』第33集, 145-150.
- 今井洋太・中山弥那子・西川知輝・大場浩正（2023）.「外国語科における継続的なSmall Talkが児童の発話パフォーマンスと自己効力感に与える効果」『上越教育大学研究紀要』第43巻, 303-312.
- 植木清華・直井涼香・渡邊祐太・大場浩正（2024）.「小学校外国語教育における社会性の育成が自己効力感に及ぼす効果－Small Talkの活動におけるSSTの導入に基づいて－」『上越教育大学研究紀要』第44巻, 305-316.
- 及川 賢（2017）.「小学校英語指導に関する教員の不安度－教員経験年数, 英語指導年数, 中学校英語教員免許の有無による違い－」『埼玉大学紀要 教育学部』第66巻, 499-512.
- 大城 賢・深澤 真（2018）.「小学校外国語活動及び外国語導入に対する小学校教員の意識－小学校教員に対するアンケート調査の分析－」『琉球大学教育学部紀要』第93集, 53-67.

- 太田かおり (2020). 「小学校外国語活動の課題と展望－小学校外国語活動に関するアンケート調査から読み解く－」『西南女学院大学紀要』 Vol. 24, 65-84.
- 大場浩正 (2020). 「英語学習におけるファシリテーション技術の活用－ホワイトボード・ミーティング®の有効性に関する予備的実践の報告－」尾島司郎・藤原康弘編『第二言語習得論と英語教育の新展開』(pp.39-54), 金星堂
- 大場浩正 (2022). 「小学校外国語活動・外国語の授業改善に向けて－外国語担当教員と外国語専科教員の意識－」『上越教育大学研究紀要』第42巻, 155-164.
- 大場浩正・高井季代子・井口元貴・金澤直哉 (2021). 「小学校英語指導におけるファシリテーション技術を取り入れた協同的な活動の開発」『上越教育大学研究紀要』第41巻, 203-212.
- 川村一代 (2020). 「外国語（英語）科におけるSmall Talkの指導～小学校での実践と中学校への提言～」『皇學館大學紀要』58, 110-135.
- 酒井英樹・内野駿介 (2018). 「小学校教員養成において必要とされる知識・能力に関する大学生の自己評価－小学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から－」『小学校英語教育学会誌』18, 100-115.
- 澁井とし子 (2019). 「小学校外国語（英語）の教員養成コア・カリキュラム－押さえておきたいポイント－」『マテシス・ウニヴェルサリス』21, 129-151.
- 白土厚子 (2022). 「小学校教員養成課程の学生の外国語に関する自己評価の変容－コアカリキュラムの視点から－」『津田塾大学紀要』第54号, 215-243.
- 立野莉沙・大場浩正 (2022). 「新学習指導要領による小学校外国語活動・外国語に対する教員の意識と課題－インタビュー調査を通して－」『上越教育大学教職大学院研究紀要』第9巻, 31-41.
- チェン敦子・村上加代子 (2013). 「小学校英語活動における教員の意識調査」『神戸山手短期大学紀要』56号, 45-50.
- ちよんせいこ (2016). 『ホワイトボード・ミーティング®検定試験公式テキストBasic 3級』株式会社ひとまち
- 津田敦子 (2022). 「教員養成課程の学生の小学校英語に対する不安の分析」『琉球大学教育学部紀要』101, 119-129.
- 原口明莉 (2021). 「自分の考えを英語で伝える力を高める外国語科の授業づくり－Small Talkに焦点を当てて－」『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』第11号, 233-234.
- 早津康平 (2022). 「小学校外国語科における「話すこと [やり取り]」への動機づけを高めるための工夫－自己効力感に焦点を当てたSmall Talkの実践から－」『教育実践論集』第32集, 157-162.
- 前田隆子 (2021). 「小学校英語教育におけるSmall Talkの役割－教員研修における意識調査結果の一考察－」『明海大学教職課程センター研究紀要』第4号, 59-66.
- 三浦公裕・菅井留美子 (2018). 「小学校教員養成課程における小学校外国語教育及び教育課程への対応－小学校外国語教育の指導向上に向けて－」『北翔大学教育文化学部研究紀要』3, 311-321.
- 文部科学省 (2017). 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm
- 文部科学省 (2018). 『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 外国語活動・外国語編』開隆堂出版.
- 山口美穂・巽 徹 (2020). 「Small Talkの継続的な実施による児童生徒の発話パフォーマンスの変化」『JES Journal』20, 84-99.
- 山口美穂・巽 徹 (2021). 「Small Talkを実践した児童の発話パフォーマンスの変化と情意の関係」『JES Journal』21, 38-53.
- 山口美穂・吉澤寛之 (2023). 「小学校外国語「話すこと [やり取り]」Small Talkにおける児童の発話パフォーマンスの変化に対する情意が及ぼす影響」『JES Journal』23, 67-82.
- 米崎 里・多良静也・佃由紀子 (2016). 「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安－その構造と変遷－」『小学校英語教育学会誌』16, 132-146.
- 渡邊政寿・大場浩正 (2022). 「初等教育教員養成課程の大学生が持つ外国語活動・外国語への意識と課題」『中部地区英語教育学会紀要』51, 141-148.
- 渡邊政寿・大場浩正 (2023). 「小学校教員養成課程の大学生の英語および英語指導に対する意識－小学校から高等学校の経年比較に基づいて－」『上越教育大学教職大学院研究紀要』第10巻, 249-258.
- AEON (2019). 「小学校の英語教育に関する教員意識調査2019」
https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/pdf/aeon_190902.pdf
- AEON (2021). 「小学校の英語教育に関する教員意識調査2021」
https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/pdf/aeon_210315.pdf

Changes in Perceptions of Foreign Language Education Among University Students in the Elementary School Teacher Training Program: From the Understanding of the Lesson Structure and the Practice of Small Talk

Hiromasa OHBA*

ABSTRACT

The purpose of this paper is to investigate how the university students in the elementary teacher training programs change their perceptions of the elementary foreign language education through learning how to conduct English lessons and practicing their own Small Talk. Previous studies have shown that the university students in the elementary teacher training programs had major concerns about the structure of the English classes and their own English proficiency when teaching English to elementary school students (Shirado, 2021; Watanabe & Ohba, 2022, etc.). In this practice, the university students learned the basics of the structure of the elementary school English textbooks and teaching methods in a class about teaching English at an elementary school. Based on the students' reflections after the class, they seemed to have realized the importance of Small Talk from a cross-curricular perspective, as well as their own English proficiency issues. It seems that their view on the foreign language education in elementary schools, which aims to nurture the abilities that form the foundations of communication through language activities, has changed significantly.

* Humanities and Social Studies Education